

「お接待」の心をキャンパスに

～愛媛大学スチューデント・キャンパス・ボランティアの取組～

佐藤 浩章

(愛媛大学教育総合センター講師)

愛媛大学スチューデント・キャンパス・ボランティアは、草の根的に行われてきた学生同士の支援活動のさらなる発展を大学として支援する教育取組である。学習支援、生活支援、障害学生支援、留学生支援、高校生・新入生支援活動を通して、学生相互の「教えあい、学びあい、助けあい」力を高めることを目的としている。

愛媛には、八十八箇所霊場を巡るお遍路さんに対して地元の人々が無理をしない範囲で、食べ物や心づけを施す極めて日常的な「お接待」と呼ばれる文化がある。本取組はそれに学んだものであり、現在六つのグループが、キャンパス内で支援活動を日常的に行っている。本稿では、その取組を紹介する。

一 本取組の内容

(一) 取組の背景

高等教育の大衆化に伴い、学びに受動的な学生が増加している。一方、メディアの発達や地域・家庭教育の衰退により、他者に無関心な学生やコミュニケーションが不得手な学生が増加している。こうした社会問題が、本学においては休学者・退学者の増加、こころの相談件数の上昇という問題となって現れている。しかし、これは全国の大学に共通する問題でもある。

この問題の解決は容易ではない。本学では学生生活支援の具体的方策をまとめた『学生担当教員の手引』の作成

(二〇〇三) や継続したFD・SD活動などにより、教職員を対象とした教育改善活動に取り組んでいるが、なかなか実効性のある成果に結びついていないのが現状である。

(二) 取組のプロセス

①第一期…障害学生支援のスタートから情報補償要求

本学では一九九五年に初めて重度の聴覚障害学生が教育学部聾学校教員養成課程に入学した。その学生に対し、同級生たちが自主的にノートテイクや手話による授業補償を始めたのが、キャンパス・ボランティアのきっかけである。

それ以後、聴覚障害学生が入学するたびに、自主的な学生による呼びかけがあり、支援が続いてきた。一九九九年には、法文学部に重度の視覚障害学生が入学したことをきっかけに、同学部の学生有志が登下校・キャンパス移動の介助やノートテイク等の学習支援活動に取り組んだ。しかし、こうした有志学生の献身的な行為は、支援者の負担並びに障害学生の精神的負担となり、その限界が次第に明らかになっていった。

このような状況を改善するため、二〇〇一年一〇月、愛媛大学ろう・難聴学生有志団体の学生によって「ろう・難聴学生に対する情報補償に関する要望書」が提出された。

要望書の内容は、(一) 身体に障害を有する学生に対する予算措置、(二) ろう・難聴学生に対するノートテイク等の全学的補償、(三) 全学的な障害学生支援センターの設置についての要求であった。直ちに、学長から「障害学生への支援については全学的な取組が必要」との意向が部局長会議において示され、対応の検討が開始された。

②第二期…キャンパス・ボランティアの誕生

二〇〇二年四月に全学組織として大学教育総合センターが設置され、同センターに障害者学習支援委員会が発足した。委員会は「登録支援ボランティア制度」を立ち上げ、全学から応募してきた登録学生が、障害学生のノートテイク、移動介助を行うこととなった。本活動は利用者(障害学生)からの強い希望により有償とされた。また登録学生向けに、手話講座、支援ボランティア養成講座といった研修も開発された。

同時期、同センターには学生モニター制度が設けられ、学生の意見を大学運営に取り入れるシステムがスタートした。その他、留学生と日本人学生の交流を目的としたサークル、阪神大震災のボランティア活動に参加した学生が中心となりボランティア活動を全学的に広めようとしたサークルなど、後にキャンパス・ボランティアとしての活動に

つながる複数の団体が、草の根的に活動を続けていた。

しかし、これらの学生組織には、障害学生支援ボランティアの登録者数は増えたもののボランティアと障害学生とのマッチング(連絡調整)が十分に機能できていないことや、学生モニターの意見が大学運営に建設的に反映されるシステムでないなど、いくつかの問題があった。

そこで大学教育総合センターに配置された専任教員のアイデアで、これまでの活動を、「お接待」をキーワードとする日常的に活動できるボランティアに改革するための検討が行われた。まず、学生モニター制度が廃止され、ESMO(愛媛大学学生メンターズ)が発足した。彼らは従来モニター活動に加え、キャンパス清掃や、学生による学生のための相談活動など、学生自らが大学キャンパスを改善していく取組を開始した(写真1、2)。また、障害学生支援ボランティアについては、その中から自発的にコーディネーターを希望する学生が現れ、学生によるきめ細かいマッチングシステムが構築された。

このように学生ボランティアは活発に活動を行うようになったが、全学的な認知度が低く人数が不足していた。また学生が活動に参加する動機は、単位や謝金よりも、むしろ他者のために役立ちたいという心にあることがわかっ

た。そこで、本取組の全学的な認知を高めるため、二〇〇三年一月に「スチューデント・キャンパス・ボランティア」(SCV)制度をスタートさせ、登録学生には大学から委嘱状とスタッフ証を配布した。これらは学生の責任と自覚を高め、学内での活動を円滑にするために有効であった。また自分たちの活動が大学運営に資するものであることが認められたことにより、就職活動時のエントリーシートに公的に活動内容を書き込めるようになった。

ESMOは、メンバーの活動が分岐し、いくつ



写真1 キャンパス清掃の様子



写真2 高校生体験入学の様子

かのグループが誕生した(表1)。従来から大学生協学生委員会が実施していた受験生相談や新入生支援活動とも連携し、高校生・新入生支援から留学生支援、生活支援、学習支援、障害学生支援まで幅広い支援活動を提供できるようになった。活動に関わる人数が少ない場合は、無理をせずグループ相互に助け合うなどして活動を補っている。現在、これらの活動に関わる学生の延べ人数は年間三五五名(二〇〇三)となり、学生同士の相互支援関係が回復しつつある。

表1 SCVのグループ名と活動内容

名称	活動内容
愛大学生メンターズ(8)	新入生・高校生に対する相談活動 キャンパス清掃、授業モニター活動
愛大ボランティアおがにぜーしょん(12)	ボランティア掲示板の整理 ボランティア普及活動
障害学生支援ボランティア(85)	聴覚障害学生のためのノートテイク 身体障害学生のための移動介助
メディア・サポーター(8)	インターネット放送局の運営 学生向け広報誌の取材・作成
国際交流コーディネーター(17)	日本人と留学生の交流の場の企画・運営
火曜ナイトサロン実行委員会(8)	毎週火曜日の夜に文化行事を企画、運営

※カッコ内は、2004年7月現在の登録人数。



写真3 お接待フィールドワーク

徳になるという相互扶助の原理が機能している。SCVの学生は、活動の動機について「他者のためでもありますが自分の成長につながる」と回答しており、「教えることで学ぶ」という相互扶助の関係が構築されている。第三は、「無償性」である。お接待もSCVの活動も金銭や単位が目的ではない。最後に「継続性」である。お接待は無理をしない範囲での日常的な活動である。SCVも、キャンパス内での日常的活動が主であり、自分たちでできる範囲の活動をやるのが基本である。

こうした「お接待」との共通点については、教職員が日常的に伝えていけると同時に、下記で紹介する研修内容にも取り込まれている。とりわけ、「お接待フィールドワーク」では、実際にお接待が実施されている寺巡り、「お接待」を実施している団体関係者へのインタビューなどを通して、その意義を体感してもらっている(写真3)。

二 本取組の特色

(一)「お接待」の心に学ぶ

四国、愛媛に残る「お接待」の文化と本取組には、共通点がある(表2)。「お接待」には、四つの特色があると言われる(藤沢真理子『風の祈り―四国遍路とボランティアズム』(創風社出版)参照)。第一は、「主体性」である。お接待は自発的な行為であり、自ら望んで行う行為である。SCVの活動は、非単位認定教育プログラムであり、参加は自由である。第二は、「福祉性」である。お接待という行為は、お遍路さんにとっては支えになるが、接待者にとっては功

表2 お接待とキャンパス・ボランティアの共通点

お接待	特性	SCV
自発的行為 自ら望んで 実施	主体性	参加は自由 非 単位認定
お遍路さん には支え、 接待者には 功德。	福祉性	他者のため、自 分のため。教え あい、学びあい、 助け合う。
金銭報酬が 目的ではない	無償性	原則単位、謝金 なし
無理しない 範囲で、近 隣での日常 的活動	継続性	無理しない範囲 で、キャンパス 内での日常的活 動

(二) 責任体制

学生ボランティアをうまく機能させるためには、適切な教職員の支援体制が不可欠である。本学では、大学教育総合センターが教育責任主体となり、キャンパス・ボランティアを確保、組織、教育している。センターでは、専任教員四名が、それぞれの業務に従事しながら、学部におけるゼミ生のように、ボランティア学生に対して日常的な指導・助言を行っている。また、留学生センター、総合情報メディアセンターといった全学共同教育・研究センターの教員も協力している。キャンパス・ボランティアには、専用のオフィス(ピア・サポート・ルーム)を用意し、物品や活動の必要経費についてはセンターで措置するなどの環境を整えている。さらに教員のみならず、学務部事務職員も施設・設備の使用や広報活動などの支援業務を担当し、きめ細かな支援体制を構築している。

(三) 研修制度

本学の専任教員が開発したオリジナルの研修制度も充実したものとなっている。新入生向けのオリエンテーションや合同説明会では専任教員も説明に加わり、キャンパス・ボランティアは一般の学生サークルとは異なることを強調

している。ボランティア全員を対象とした年に一度の研修会は、オリジナル教材を使用して、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力、チームワークを身につけることを目的とした実践的なものである。また学生を確保したり、研修したりする目的で「キャンパス元氣プロジェクト」「イベントプランナー養成講座」「障害者支援ボランティア講座」「手話講座」(以上、共通教育科目)、「ノートテイク支援技術養成講座」「映像クリエータービギナーズ講座」「サークルリーダー養成講座」(非単位認定プログラム

表3 教職員が企画する研修制度

新人研修	新入生向けオリエンテーション キャンパス・ボランティア合同説明会 お接待フィールドワーク
メンバー研修	キャンパス・ボランティア・スキルアップ研修会 キャンパス元氣プロジェクト (共通教育授業) イベントプランナー養成講座 (共通教育授業) 障害者支援ボランティア講座 (共通教育授業) 手話講座 (共通教育授業) ノートテイク支援技術養成講座 映像クリエータービギナーズ講座
リーダー研修	SCVリーダーズミーティング サークルリーダー研修会

ム)といった授業・研修が用意されている(表3)。また上記のOfficerJTのみならず、学外の専門家から日常的に助言を受けながら業務を進めているグループもあり、OJTの機会が豊富に提供されている。

三 学内外での認知度

学内の一般学生の認知度であるが、二〇〇四年度から新入生全員にパンフレットを配布し、学生生活ガイダンスの際に説明をしている。教職員からは「今時の学生は覇気がないと思っていたが、非常に積極的なので驚いた」(法文学部教員)「若い学生と一緒に仕事ができ元気が出た」(学生と交流する機会がある教務課にいて良かったと思う)「学務部職員」との声があがっている。学生たちの動きに刺激され、学務部のみならず、従来学生との接点が多くなかった部局においても学生と連携する動きが広がり始めている。例えば、経理部では学生とともに大学周辺の清掃作業を行ったり、構内の放置自転車問題を学生とともに考えたりしている。また施設部では建物リニューアルを目的としたワークショップを開催するなどといった動きがある。また、二〇〇三年度には、従来、スポーツ等で顕著な活

躍をした者にも授与されていた学長表彰を、障害学生支援コーディネーターとして活動していた学生が受賞した。彼女は、障害学生のノートテイクや手話通訳を行い、さらにノートテイクと聴覚障害学生のマッチングを、学業と並行させながら継続的に務めてきたが、その地道な活動が高く評価されたものである。

学生たちの活動は、マスコミからの注目を受け、新聞やテレビでもしばしば紹介されている。地元の新聞社は、これまで数度、キャンパス・ボランティアの活躍ぶりを紙面で取り上げた。また地元のテレビ局は、学生の自主的な文化企画である「火曜ナイトサロン」を取り上げ放映した(二〇〇三年六月 愛媛CATV放映)。

四 取組成功の要因

この取組が成功した要因は三つある。第一に、問題の共有である。解決策や実施方法を教職員が決定した上で、学生の協力を求めるという形では、動機が下がってしまう。教職員も悩んでいる問題を共有する段階から、学生に参加してもらい、共同で問題解決に取り組むことが重要である。

第二に、適切な教育・指導である。こうした活動は、学

生任せにしてしまいがちであるが、それでは機能しない。日常的な活動に対して、細かく指導すると動機が低下する可能性もあるが、現実性や規則、コストなどの制約を知らせること、新任スタッフ研修並びにリーダー研修等を通じた適切な教育・指導を行うことは重要である。これがないと、夢だけを見せて落胆させてしまい、急速に士気を低下させる結果となる。

第三に、その活動を学内外で認知させることである。学内広報やマスコミなどを活用し、成果を公にすることで、学生スタッフの自信となる工夫をする必要がある。

第四に、最も重要なのが、教職員の意識統一である。FD、SDの場で説明をして共通理解を獲得することが不可欠である。二〇〇四年度には、「夏の集い」と呼ばれる教職員とSCVの交流の場が設けられたが、これは教職員からの「お接待」の場である。教職員が会場手配・運営までを行い、学生はこの日ばかりはゲストとしてこの行事に参加する。この場では、SCVが一同に介し、多くの教職員に日常の活動を対面で報告する場として機能している。教職員の理解を得るにはよい機会である。

五 課題と展望

本取組は、学生と教職員の新たな関係を構築し、大学の教育力を高める新しい視点を提供するものであるが、いくつかの課題が残されている。

第一に、参加学生数の不足という課題である。既存グループの広報活動を充実し、学内での認知度を高める必要がある。メディア・サポーターによる広報宣伝活動を強化していきたい。

第二に、活動分野の拡大が求められている。例えば、就職支援に関わっては、キャリアサポーターの設置が求められる。これは、就職内定をもらった学生が、後輩並びにまだ就職が決定していない学生の相談にのるボランティアである。これについては、他大学での成功事例が多くある中で、早急に立ち上げを目指したい。また、図書館では、本が好きな学生たちを中心に図書館サポーターの設置を希望している。書評を書いたり、学習をしやすい環境づくりをしたりする活動が想定される。

第三に、このような活動に自主的に参加できない学生達の存在にも注目していきたい。冒頭で述べた休退学の問題

や、不登校など心の問題はますます深刻化することが予測されるが、教職員からの一方的な取組だけでは解決し得ない状況である。学生同士の仲間意識に基づく、等身大で日常的かつ継続的な相談活動が新たな活路を見出す手立てとなると確信している。

最後に、正課外教育における学生同士の相互支援にとどまらず、正課教育にも本取組を導入することを検討している。学生の大学での経験総体に対しての働きかけがなければ、「お接待」の心は定着しない。具体的には、正課の授業の中で、先輩（学部学生）が教育スタッフ（スチューデント・アカデミック・ボランティア）として後輩を指導する環境を整備していきたい。二〇〇四年度からは、医学部、法文学部で学部学生が、一・二回生向けの授業の補助を行うアカデミック・ボランティアとして活動中であり、その効果に期待しているところである。

お接待の心に学ぶキャンパス・ボランティア。私たちは、この土地に残る美風を新しい形で甦らせた本取組をさらに充実・発展させることで、若い世代がこの文化を継承していくことを願っている。